～別院だより～
モダン寺新聞
第28号
発行所
浄土真宗本願寺派　本願寺神戸別院
〒650-0011
神戸市中央区下山手通八丁目一番一号
TEL078-341-5949

今月の法語
人の目を通して見たものは
真の姿ではない
如来は常に私たちに
真の光を照らし続ける
如来の光に照らされたものは
自らの真の姿に気付かされる

別院の東壁にある掲示伝道（下の百日草は自治会のお世話によるもの）

別院の秋季彼岸会
～法（みのり）の秋～

彼岸の中日（九月二十三日）を挟んで三日間、秋季彼岸会が営まれました。

彼岸とは、悟りの岸・悟りの世界、仏様の国の意味であり、季節を表す言葉ではなく、『お浄土』を表す仏教のお言葉であります。

彼岸会は、一年を通して最も穏やかな季節の春と秋に、自らの行いを省み、阿弥陀様のご本願の船に乗せられて、悟りの彼の岸へと渡らせていただく、この身のしあわせをよろこぶ法要です。

この度の法要では、本願寺派布教師・若林眞人先生より、次のようにご法話をいただきました。

世間には色んな宗教、立派な教えがありますが、あなたの人生を虚しくは終わらせない、こう言い切られるのは阿弥陀様の願いだけであります。

阿弥陀様は私達をどの様に見ておられるか、親鸞様は次の様な厳しい言葉でお示しになられました。

『一切の群生海、無始よりこのかた乃至今日今時に至るまで、穢悪汚染にして、清浄の心なし。虚仮諂偽にして真実の心なし。』

生きとし生けるものは、始めのない昔から今日ただ今に至るまで、汚れきって清らかな心をひとかけらも持ち合わせていない。嘘偽りに塗り固められて、真心（まことごころ）をひとかけらも持たない姿である、と見抜かれた。

衆生には真実がない、と見抜かれた阿弥陀様。火種をひとかけらも持たないものは、燃やしようがない。ならばこの弥陀が真実となりきって、その身に入り満ちようじゃないか。ナンマンダブツの火種となって、その身の中に入り満ちて一緒に燃えようではないか。

と、一片の真実もないこの私に入り満ちて下さる仏様、お念仏となって私の身に入り満ちて下さる仏様が、阿弥陀様なのであります。

お念仏なさるってことはえらいことです。これは人間の言葉ではない、仏様が言葉となって私にかかりはて、しかもここに入り満ちて下さる。皆さん方大変な凡夫になった、ただの凡夫じゃない。**『なんまんだぶつ入り満ちた凡夫』**に成らしてもらったんだよ、と。

限定を超えた仏様の世界・浄土。太陽の沈む先、西方十万億仏土の彼方に、阿弥陀仏の浄土を想う時。

ナンマンダブツのお念仏は、お浄土よりの『はたらき』でありました。私もあなたも、みな諸共に帰って往く世界がありましたなぁ、といただいたお彼岸でありました。

モダン寺もの知り手帳

宮殿（くうでん）

宮殿と書いて「くうでん」と読みます。宮殿とは、礼拝の対象であるご本尊（阿弥陀如来）を安置する厨子の一種で、皆さまが本堂にお参りに来られた時、阿弥陀様と共に、まず一番に目に入ってくるものだと思われます。

教えの内容を具現しているところだけに、宗派による形の違いなどが、良く分かるところでもあります。

私たち本願寺派の寺院では、宮殿に瓔珞（ようらく）という荘厳具（しょうごんぐ）をつるし、戸帳（とちょう…モダン寺新聞２７号参照）を掛けて荘厳（お飾り）します。また、宮殿内において本尊の上部に、仏天蓋（ぶってんがい）と呼ばれる天蓋を吊るすこともあります。

本願寺派の宮殿

しかしながら、旧モダン寺の宮殿をそのまま受け継いでいる当別院の宮殿は、そういった本願寺派の基本的な荘厳形態を踏襲しながらも、その姿は他の寺院には見られない、非常に珍しい形をしております。

その中でも、最も特徴あるのが、屋根の部分ではないかと思われます。（右下写真）

インドの仏跡を巡られた事のある方なら、この空殿屋根が何をモチーフとしているかが、一目で分かるのではないでしょうか？

写真上部にある四角錐の出っ張りは、お釈迦様がお悟りを開かれた、インドはビハール州、ブッダ・ガヤーの大塔を模したものなのです。（左下写真）

お釈迦様は、この大塔の傍らに立つピッパラ樹（菩提樹）の下で禅定に入られ、目覚めた者（ブッダ＝仏陀）と成られました。

ブッダ・ガヤーの大塔は52メートルもの高さを誇り、お釈迦様が悟られたという菩提樹の周辺に設けられた道場を起源とする、マハーボディー寺（大菩提寺）の本堂にあたります。

この寺院も、お釈迦様生誕の地ルンビニー同様、アショーカ王によって紀元前3世紀に建てられた精舎（寺院）に由来するものです。

大塔の正確な建造年代は不明ですが、7世紀にインドを訪れた唐の玄奘三蔵の記録によると、当時には、ほぼ現在の形の大塔が立っていたと伝わっています。

神戸別院の宮殿

しかし、イスラム軍の侵攻が激化した12世紀にこの寺院は放棄されてしまいました。言い伝えによると、最後の仏教徒達は大切な聖地のシンボルである大塔を破壊から守るため、精舎全体に土を覆って小高い丘と偽装し、破壊から守ったそうです。

以来、六百数十年のあいだ土中に埋もれ忘れ去られていましたが、一八八〇年にイギリス人アレキサンダー・カニンガムによって発掘・復元されました。

お釈迦様成道の地、ブッダ・ガヤーに天高くそびえ立つ大塔は、その建立より幾百年の時と数多の願いを刻みつづけ、今も仏教徒最大の聖地のシンボルとして立ち続けているのです。

モダン寺のお宮殿を見るとき、成道の地を守り抜いた仏教徒達の切実な願いに、胸が熱くなるのです。

昭和五年完成の、旧モダン寺の設計を指導された大谷尊由師は、成道の地のシンボルを宮殿のデザインに取り入れることで、お参りする私達に向かって、本当に願っていくべきものは何であるのか、受け継いでいくべきものが何であるのかを、お示しになられたのであります。

翌昭和六年の満州事変を起点とし、「日中戦争」「太平洋戦争」と進む激動の時代を背景とし、将来的に〈真宗教団は、寺院は、教えはどうなっていくのか〉との危機感が、今までの形式を全く打破した形とも成ったのでありましょう。

ブッダ・ガヤーの大塔

子どもが笑えば大人も笑顔、夏の思い出

～サマースクールinモダン寺～

七月二十二日(火)～七月二十四日(木)の三日間に渡り、第四五回兵庫教区少年連盟サマースクールが、当別院を会場として開催されました。

兵庫教区中から集まった子供たちは七十九名。スタッフの先生二十九名を合わせて、総勢百八名でのサマースクールとなりました。

開催期間中は三日間共、雲ひとつ無い快晴。眩しいほどの日差しの中、集まった子供たちの笑顔は宝石の様にキラキラ。スタッフの先生も、子ども達の笑顔に囲まれてニコニコ笑顔。

今回のサマースクールのテーマは

『いのちをみつめなおそう』

開催地である神戸市は、阪神淡路大震災により非常に大きな被害を受けた地です。

あの震災から十三年が経ち、今年のサマースクールに参加した子ども達のほとんどが、直接震災を経験していない世代となりました。

そこで子ども達へ、地震の恐ろしさや悲惨さ、震災で学んだ教訓や、人と人との絆の大切さを伝えていく。

そして、あらためて今、いのちの尊さと、その根源的なあり方を見つめなおしていこうと、テーマを『いのちをみつめなおそう』として、神戸でのサマースクール開催となりました。

サマースクール初日より、三四度を越える真夏日となりましたが、子ども達は元気いっぱい。初めて出会うお友達ばかりの中で緊張していた子も、スタッフの先生達との仲間作りゲームで、すぐに仲良く打ち解けて、笑顔がこぼれる様子が見えました。

初日のメインイベントは横断幕作り。幅7メートル、高さ2メートルの白布に皆の手形で、テーマである『いのちをみつめなおそう』を描いていきました。また、夜には普段なかなか経験できない、重誓偈律曲のお勤めや雅楽の演奏を体験しました。

二日目には『人と未来防災センター』『日本赤十字社』で、いのちの研修。地震の体験や防災、非常食の作り方などを学びました。

就寝前の『ともしびの集い』では、藤川正敏先生よりお話をいただき、いのちの尊さについて子ども達だけではなく、スタッフも共に考えさせられました。

震災の経験がない子ども達も、震災の恐ろしさ、非常時の備えの大切さ、そして『いのち』について、多くのことを学んだ二日でした。

最終日には、ウォークラリーでお寺の周辺を巡った後、クイズビンゴゲームで、学んだことをおさらい。最後にこのサマースクールの思い出など、一年後の自分へのメッセージを葉書に書いて閉校式となりました。

スタッフの先生方をはじめ、多くの方の応援と支えによって、モダン寺が、子ども達のキラキラの笑顔で溢れる、いのちの学校となった三日間でした。

みんなで作った横断幕の前で

満堂の中 盂蘭盆会勤まる

八月十五日(金)午後一時半より、本願寺神戸別院本堂において、盂蘭盆会(うらぼんえ)が勤められました。なお、京都の御本山(西本願寺)においては、例年八月十四、十五日の二日間勤まります。

浄土真宗では、この盂蘭盆会を「歓喜会(かんぎえ)」ともよびます。

「歓喜」の「歓」は身によろこぶことであり、「喜」は心によろこぶことであるともいいます。

阿弥陀如来の本願に遇い、往生を得ることをよろこぶこと。必ず往生できるとよろこぶ心、としての「歓喜」であります。

亡き人をご縁として恵まれた尊い仏縁を喜び、阿弥陀様のお慈悲(本願)の中、必ず浄土に往生し、さとりを得させていただく身と成らせていただく。私が阿弥陀様の願いに遇わせていただく。お盆はお念仏の味わいを深める大切な仏事であります。

法要当日は八月の厳しい暑さの中にもかかわらず、多数の参拝をいただき、本堂は溢れんばかりの参拝者の熱気で一杯。本堂中に、お念仏の声が響き渡っておりました。

法要は午後一時半より執り行われ、行事鐘、諸僧入堂の後、松村彰道輪番を導師として、仏説阿弥陀経のお勤めが勤まりました。

法要後の法話は、当別院輪番がお話をさせて頂きました

法話の中で輪番は、浄土真宗の門徒の、お墓参りの味わい方について「お盆のお墓参りを見ると、一見それは自分の力、自分の意思、自分の足で参っている様に見えます。しかし実はそうではなく、私にお墓参りをさせている者がいるのです。

子どものお墓に参る母親は、自分の意思、自分の力で参っている様ですが、実は、自分の子どもが母親をしてお墓に参らせている。

我が子に催されて、我が子の催促を受けて、その母親はお墓に参っている…。

皆さんが昨日行かれたお墓参り、実は私の夫が、私の親が、私の子が、そのように私をして参らせしめた、私の足をお墓に運ばせたんだ。という風に思い出だして、いただくものであります」と述べた。

また、浄土真宗のお墓参りの肝要について、「亡くなられた故人を偲ぶということは、お墓参りの大切な意義の一つではありますが、それだけではありません。

亡くなられた方は一体何になっているのか?どこで何をしているのか?そしてまた、自分は何になっていくんだろうか?

浄土真宗の門徒はそれを見定めないといけないのであります。

亡くなったら、清めの塩を撒かれる穢れた存在となる?往き場の無い迷いの存在(幽霊)となってウロウロさ迷う?燃えカスとなってゴミとなる?

世間一般には様々な考えがありますが、私たち浄土真宗の門徒は、浄土へ生まれ仏と成っていく、そして仏様と同じはたらき、私を導くものとなってはたらいて下さる、と受け入れていくのであります」と述べた。

ご法話の最後には、本願寺十四代ご門主・寂如上人の、

『引く足も、称うる口も拝む手も、弥陀願力の不思議なりけり』

という歌を引かれ、「暑い最中にお参りをする、我が子の墓に手を合わす、これも仏様の成さしめた姿でございました。仏様の願力に催された姿でございましたか、といただくのが浄土真宗のお墓参りの仕方でございます」と結びました。

本堂満堂のご参拝

ご法座のご案内

報恩講

十一月二十七日～二十九日の三日間、報恩講法要が勤まります。

・二十七日(木)
午後一時半　逮夜法要
午後五時半　初夜法要

・二十八日(金)
午前七時　晨朝法要
午前十時　日中法要
午後一時半　大逮夜法要
午後五時半　初夜法要

・二十九日(土)
午前七時　晨朝法要
午前十時　満日中法要

報恩講は、親鸞聖人のご苦労を偲び、そのご苦労を通じて、お念仏のお法(みのり)を深く味あわせていただく、浄土真宗門徒にとって、最も大切なご法縁でございます。

本年度のご講師は、加藤順教先生(大阪教区 自然寺)です。

第一土曜仏教講座

毎月、第一土曜日の午後一時半より、ご講師の先生をお呼びして、仏教に関する講話をいただいております。

十一月のご講師は吉川恭先生(山陰教区 永照寺)、ご講題は『わたしの中で 今 大悲のご恩が息してる』です。

常例法座・仏婦常例法座

毎月十五日・十六日の午後一時半より、常例法座がございます。

十一月は藤朶義文先生(兵庫教区 新宮組 浄教寺)をお招きしての、ご法座でございます。

毎月七日、午後一時半より、別院仏婦主催のご法座がございます。

十一月は、福田高明先生(兵庫教区 網干組 圓勝寺)のご法話を頂戴いたします。

皆さまのご参拝を心よりお待ちしております。

編集後記

お彼岸の次は報恩講。今年は別院の報恩講で帰敬式が行われます◆帰敬式の受式は、仏教徒として新たな生を歩む宣言です◆帰敬式を受け、出遇ったみ教えが、私の生にどのような意義があるのか、味あわせていただくのであります。　(事務局／YS)